

居場所づくりと支援者の役割

—岩手県奥州市ホワイトキャンパスを事例に—

李 智

本稿は岩手県奥州市にあるホワイトキャンパスを事例に取り上げて、子どもにとっての居場所の意味を考え、そうした実践をつくったスタッフの働きかけの上での価値や姿勢を検討し、居場所支援の限界と可能性を検討した。その結果、スタッフは子どもの自己決定や自主性を促し、〈子どもの参画を支援する〉という中心的な価値のもとに、〈子どもを深く理解すること〉や〈気づいてもらうための支援をすること〉を通して、実践を作り上げている。また、スタッフは居場所の〈第三の空間〉としての独立性を大切にしながら、実践のなかでゆらぎを感じている。ホワイトキャンパスはこのような独立した〈第三の空間〉をつくることに意味があり、今後の子どもの居場所や放課後事業をすすめる際に示唆を与える。

キーワード：居場所、第三の空間、支援者、役割

はじめに

居場所づくりは当初子どもの学校外における文化活動の空間を保障する目的から始まったが、そのなかで特に不登校、ひきこもりなど学校離れの子どもを対象としたフリースクールの展開を契機に社会的に認知されてきた。その後、政策のなかでも使われるようになり、現在「居場所」は多様な意味や形態を呈している。政策上では、2007年から「放課後子どもプラン」がすすめられており、各小学校区という、子どもの生活圏において日常的な居場所づくり事業が展開されている。

この施策の転換によって、子どもの居場所型施設が学校のなかに集中してつくられるような傾向を見せている。同時に、実践においては、子どもが自由に自分の時間や活動内容を決められるようなものではなく、管理的かつ教育的なものが多く見られるようになる。しかし、居場所は空間を提供し、学校の延長線で活動プログラムを行うものにとどまってよいのだろうか？そして居場所の独自の意義は何であろうか？これに対し萩原(2001)は居場所の意味を「①「自分」という存在感とともにある；②自分と他者との相互承認という関わりにおいて生まれる；③生きられた身体としての自分が、他者・事柄・物へと相互浸透的に伸び広がっていくことで生まれる；④同時にそれは世界(他者・事柄・物)の中での自分のポジションの獲得であるとともに、人生の方向性を生む」として提示して

いる。つまり居場所は、そこにいる人が他者との関係の中で作られた、自分が認知したものであり、空間的概念というよりも関係性の概念としての意味合いが大きい。したがって、単なる物理的な施設ではなく、子どもにとって意味ある空間として居場所が成り立ち、その空間のなかでどういった関係性が構築され、そしてその関係性が子どもの自己形成にどういった意味をもつのかということがきわめて重要である。その際、そうした関係づくりにはスタッフがどのような役割をはたすかがカギをにぎっている。

居場所は子どもが自由にありのままにいられる空間であり、一見すれば大人は何もしなくていいように考えられがちである。しかし居場所は自生的なものではなく、大人の支援を通して作られるものであるため、大人の意思が決定的に重要である。また、居場所への参加は常に予定調和的ではなく、多様な子どもが来て、さまざまな葛藤と問題が絡んでいるため、大人の働きかけを過小視してはいけない。

一方、居場所における大人(スタッフ/職員)の役割について論じたものはまだ少ない。水野(2001)は居場所に必要な指導者が「①空間を運営する面では、施設内に多様な他者とのコミュニケーションの機会を仕掛け、運営に関わるボランティア・グループを関係の場として提供すること；②居場所を社会の中に位置づける面では、社会参加の機会としてボランティア・グループ体験を提供し、居場所と地域社会を媒介し、若者と社会をつなぎ、参画を進める」ようなことが求められると提示している。つまり、居場所における指導者は若者を居場所内の他者と繋げながら、広い社会へと繋ぐような媒介者としての役割が望まれているということである。また、田中(2001)は子どもの自己決定を促し、他者との関わりを繋げるような居場所を保障するためにファシリテーターの役割に期待し、「技術」(テクニク)のみでなく、理念と方法を兼ね備えたメソッド(技法)として理解することが重要と指摘する。さらに、不登校向けのフリースクールを長年運営してきた西野(2006)も居場所は「快適に過ごせるスペースよりも大事なこと。それは、どんな思いで、どんなまなざしをもったひとがそこに居つづけるのかということ」と示している。田中がいう「理念」と西野がいう「まなざし」は共通的なものとして理解することができよう。

しかし、田中や西野はそういった「理念」や「まなざし」が重要であることに言及しているが、内実の解明までは展開されていなかった。その「理念」や「まなざし」はスタッフが子どもに対する観念と姿勢として考えられるが、それを論じる実証的な研究が少ない。また、そういった理念や「まなざし」はスタッフが子どもと関わっているなかでつくられるものだと考えられるが、実践文脈に即しながらその内実を明らかにすることが求められているのではないか。

こうした問題意識のもとで、本稿では居場所のスタッフに対してインタビュー調査を行い、語りからスタッフが働く際の考え方や関わり方を解明したうえで、根底にある価値観を探ることを通して、居場所における役割を明らかにする。ここでは岩手県奥州市にある子どもの居場所やホワイトキャンパスを事例にとりあげる。ホワイトキャンパスは1999年に開設した小学生から中高生までが利用するフリースペースである。その特徴は、①居場所を開設する準備段階から現在の運営まで中高生が参画している；②ノンプログラムで、子どもが独自に居場所を運営し、利用する；③多様な

住民がスタッフとして関わることであり、地域における子どもの形成空間の再生を実現している実践にある。そしてホワイトキャンパスは設計、改修作業および運営まで中高生が参画している点で先進事例として多く報告されている¹⁾。本稿では、子どもにとっての居場所の意味を考えたいので、そうした実践をつくったスタッフの働きかたに焦点をあてて、居場所支援の意義と可能性を考える。

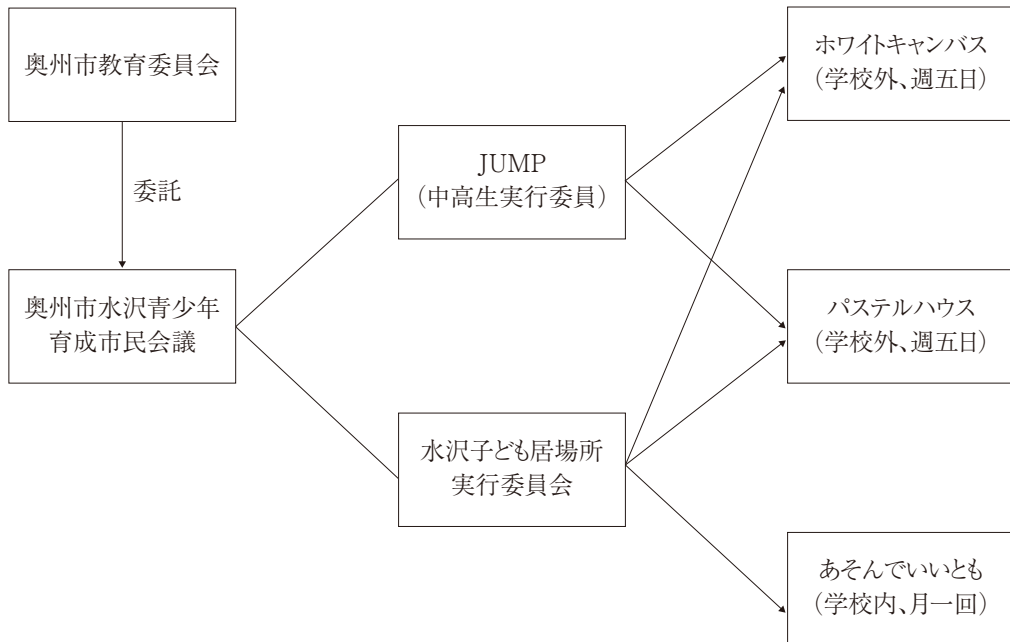
1 調査対象と研究方法

1.1 事例の概要

ホワイトキャンパスは1999年に旧水沢市ⁱⁱ⁾に開設した子どものフリースペースである。ホワイトキャンパスは「『中間領域』な空間を提供することで、異年齢間のふれあいや、人間関係を学ぶ機会をもってもらうこと」ⁱⁱⁱ⁾を目的としている。ここでいう「中間領域」とは学校や家庭以外にある、子どもが多様な他者と関わり、関係を作ることを通して、自己を形成していく「第三の空間」を意味している。

旧水沢市では1999年から①中高生が放課後に行く場がない；②中高生ジュニアリーダーサークルは活動拠点が無いという2点から当時の水沢市青少年育成市民会議が市教育委員会より委託を受けて、独自の子どもの居場所事業を展開してきた。ここでの運営は中高生を主体にして、地域のボランティアが構成した子どもの居場所実行委員会（以下実行委員会）と共に行われている。本稿で取り上げるホワイトキャンパスはそのなかではじめて作られた居場所である。開設当時は中高生の居

図1 奥州市水沢区における子どもの居場所事業の構図（資料にもとづき作者より作成）



場所として位置づけられていたが、翌年から利用対象者が小学生まで広がった。その後2002年に2ヵ所目のフリースペースであるパステルハウスも開設し、2ヵ所とも週5日間、平日は15時から18時、土日休日は10時から18時まで開館し、それぞれの休館日が重ならないようになっている。そのほかに、小学校内に週一回、遊びを提供する「あそんでいいとも」も展開されている。現在3ヵ所とも放課後子ども教室として奥州市の放課後子どもプランに位置づけられている。(図1)

1. 2 研究方法

本稿では、ホワイトキャンパスの概要から、そこでの子どもの関わり方や子どもにとっての居場所の意味づけについて検討する。それから、大人スタッフが子どもと関わる際の観念や姿勢を、語りに即しながら考察し、実践の意義を考える。

今回、居場所における大人の役割を明らかにするために、フィールドワークを使って調査を行った。以下は2011年1月から9月までホワイトキャンパスにおけるフィールドワークで観察したもの^{iv}、中高生サークルの定例会やスタッフ会議の録音データ、過去2年間のスタッフ会議の配布資料やホワイトキャンパスとパステルハウスのスタッフ日誌、そしてその他文書資料に基づいてまとめた。そのほか、事務局職員1人、スタッフ5人や中高生サークルのメンバー2人に対するインタビューを行った^v。スタッフに対しては主に、活動参加のプロセス、子どもと関わる時に大切にしていること、意識していること、居場所の意味や課題に対する認識について半構造化インタビューを行った。調査を行ったスタッフのプロフィールは次の表1の通りである。

表1 調査者の概要

	年齢	性別	活動歴	居場所に関わる年数
C	40代	女	地区の青少年活動のボランティア	2年
D	50代	女	民生児童委員	2年
E	60代	女	民生児童委員、「群の会」会員	12年
F	40代	男	「群の会」会員	5年
G	40代	女	地区センター（公民館）のスタッフ	3年
H	60代	女	事務局	12年

2 「居場所」としてのホワイトキャンパス

2. 1 ホワイトキャンパスの位置と空間配置

ホワイトキャンパスは奥州市水沢公園に隣接している二階建ての建物の一階にあり、旧水沢市の消防署跡を改修して作られた。建物に「ホワイトキャンパス」という大きい看板が飾られており、もっとも近い小学校からは徒歩で12分、中学校からは31分かかるといふ、学校からやや遠い位置にある。しかし、公園に隣接しているため、外遊びができる利点がある。利用者は年々増えており、平成22年度の利用者数は4715^{vi}名で、その半数が中学生である。

図2 ホワイトキャンパスの内部配置(資料に基づき筆者より作成)

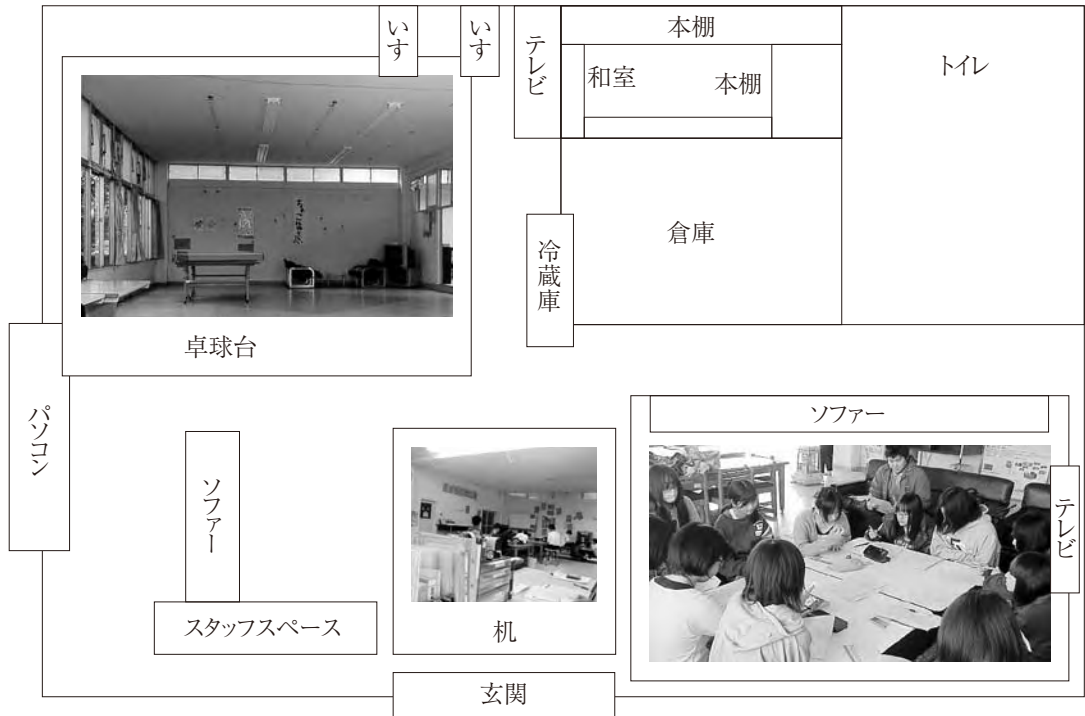


図2はホワイトキャンパスの配置である。建物は天井が高く、スペースは270㎡ある。玄関を入ると、左手に利用者日誌が置かれており、入る時に子ども、大人を問わず名前を記入することになっているが、行き来は自由である。その隣にスタッフスペースがあり、パソコンや電話が設置されている。部屋のなかにインターネットが使用できるパソコンが3台あり、子どもたちはゲームや情報検索に使用している。右手には大きなテーブル、ソファー、こたつが配置され、冬は大勢の子どもたちがこたつを囲んでおしゃべりをしている。後方の壁には子どもたちが習字で書いた新年の抱負が貼られている。その奥に和室があり500冊ほどの図書が置かれている。また、トイレも設置されている。

ホワイトキャンパスはノンプログラムである。したがって、子どもたちは思い思いに利用のしかたをこの空間でつくりあげていく。ホワイトキャンパスではふだん、多いときで40人前後、少ない時は5、6人の子どもが来所している。一人で来てパソコンをする子もいれば、友だちと一緒に来て遊んでいる子もおり、参加のしかたは多様である。部屋の端に卓球台やパソコンが置かれており、空いているスペースでは子どもたちはバドミントンをする。反対側にある机は子どもたちがカードゲームをするスペースである。その隣のこたつでは一人でくつろいだり、テレビを見たりする子がいる。またそこは放課後や土日に来る中高生にとってのお気に入りの談笑するスペースでもあり、月1回の会議もここで行われる。スタッフスペースは和室以外の空間がすべて見渡せるような位置となっている。利用者が入ってくると、スタッフから声をかける。また、スタッフスペースに来て、

スタッフに一日の様子を話したり、バドミントンや卓球に誘ったりする子どももいる。

2. 2 子どもにとっての居場所の意味

「第二の家」としてのホワイトキャンパス

ホワイトキャンパスを構想する段階では、地域子ども育成者サークル「群の会」と中高生ジュニアリーダーサークル「JUMP」^{vii}のメンバーが中心となり準備委員会を立ち上げて、企画や壁のペンキ塗り、フロア貼りなど実際の作業も行った。開設後、準備委員会は運営委員会へ変わり、「JUMP」は中高生運営委員として運営に参加している。その「JUMP」は毎月の定例会をホワイトキャンパスで行っている。そして活動ごとの話し合いや準備作業もホワイトキャンパスで行われることが多い。ホワイトキャンパスは「JUMP」のメンバーにとってどのような意味を持っているだろうか。

*：「JUMP」にとってはホワキャンってどういう存在ですか？

A：私はホーム。

B：うむ、なんかJUMPというよりも、私たち個人個人にとっては結構第二の家という子が多い。やっぱりなんかきょうだいがいない子たちもいるし、お母さんみたいなスタッフもいるし。

*：ふだんあまり来る機会が少ないみたいなので、そういう感覚をどういうふうにつつまうようになったのですか？

B：あ、やっぱりこう活動活動の終わりにみんなで来たりしてて、でも、なんか、遊ぶにしてもここ集合ねって、集まったりする時とか、あと遊んでてもなんか次何しようとなったときに、じゃホワキャンに行こうということになるんですよ。で、やっぱりそうやって、くつろぐ、私は結構落ち着いて、すごく安心できる場所なので。…こうみんなとワイワイするのがすごく好きなので、別に接してなくても、小学生がわけわからなくしているのも結構楽しみだったりするし、というのもあって、たまあに、行ってみようかなと思ったりして、やっぱり、結構来れば来るほど、やっぱここいいなあっていう思いがあるんですね。

*：Aさんはスタッフ会議の時に、ここなかったら今の自分がないといったので、なぜそうだろうなと思っていました。

A：なんかジャンプ＝ここという感じがあるから。

B：なんか拠点地ってここだよね。

A：そうね。ここを架けにして、

B：動いているから。

A：そう、発信しているみたいのがあるから。

この語りからみられるように、ホワイトキャンパスは「JUMP」の子どもたちにとっては第一に、安心してくつろげる「第二の家」となっている。「家」というメタファーで語られているのは、ここ

に來れば、「きょうだい」のような仲間と一緒にワイワイできるし、温かい目で見てくれる「お母さん」のようなスタッフがいると認識されているからである。

第二に、子どもたちは「遊ぶ時にホワイトキャンに集合」したり、「なんか次何しようとなったときに、じゃホワイトキャンに行こう」としたりするように、ホワイトキャンパスの持つ何らかののんびりした雰囲気から子どもたちが自由さを得られている様子が見えがえる。それゆえ、ここは子どもたちの活動の拠点となって、新しい活動を想像して創っている。ホワイトキャンパスはまさに「JUMP」にとってのジャンプ台のような意味を持ち、社会参加活動への出発点となっているのであろう。

第三に、以上2点から見たような、子どもにとってホワイトキャンパスが「第二の家」であり、「発信する拠点」となることは居場所の自生的な意味ではなく、そこを利用しているうちに、他者との相互作用のなかで徐々に意味づけられていったのである。それゆえ、子どもたちは「來れば来るほど」ホワイトキャンパスのことを「いいなあ」と思って、自分たちにとって意味のある空間になっていくのである。

外部の目から見たホワイトキャンパス

ところが、子どもたちはホワイトキャンパスに來れば来るほど「いいな」という思いを深くする一方で、外部からは「特別な子がたむろしている場所」という意味が付与されたりもする。

ホワイトキャンパスではさまざまな子どもたちが利用しており、子どもの参加の仕方がそれぞれ異なる。図書、パソコンやスポーツ道具が多数置かれているため、多くは放課後の遊び場として利用している。しかし、少しやんちゃな中高生集団も来て、利用者間でトラブルが起きることもある。またスタッフに感情をぶつけたり、物を壊したりする場面も見られる。そのほかに、居場所を拠り所としてほぼ毎日來ている子もいる。このようにさまざまな問題を抱えて居場所に来る子も少なくない。過去には、雑記帳の記載により、利用者間での恐喝が発覚したケースがあった。お金を要求した側は家庭が経済的な困難を抱えて、今までも色々な問題を起こしており、児童相談所に措置されそうになったことがある。その子の母親は自身が子どもの時に親から愛された記憶がなく、娘とどう向き合えば良いのか悩んでいた。また、3ヶ月間毎日居場所に來ていた子どもは、親から暴力を受けて、中学校を卒業したと同時に家出をし、ずっと野宿をしていたということが分かった。

このように多様な子どもが利用していることで、外部から誤解を受けることがある。時には自分の子どもに対して「あそこに行くな」という保護者もいる。

スタッフの居場所観

こういった誤解に対して、スタッフはゆらぎながら、実践の意味を問いかけている。スタッフは子どもたちを「大多数が葛藤しながら生活しているのが中高生世代」と理解し、「とがっていることが成長の証し」としてとらえている。つまり、子ども、特に中高生世代は家庭や学校以外に、自由でリラックスする空間は欠かせず、それによって自己を確立していくため、スタッフたちは地域のなかでそういった空間を守ろうとする使命感を感じている。したがって、外部からの偏見に対して、

中高生運営委員とともに公的な場でホワイトキャンパスの実践を紹介し、理解を広げる機会をつくとともに、居場所の独自の価値を保つために、「第三空間」としての姿勢をつらぬいている。

3 居場所におけるスタッフの関わり方

3.1 スタッフの概要

ホワイトキャンパスは奥州市水沢青少年育成市民会議が事務局として、子どもの居場所実行委員会(以下実行委員会)を組織して水沢区内3ヵ所の居場所を運営している。事務局には青少年育成アドバイザーがいて、実行委員会のメンバーはすべて地域のボランティアである。居場所のスタッフには、資格は求められないが、居場所の理念である「子どもが主役、大人が黒子」に理解を持ち、子どものありのままの姿を受け入れることが条件で、これまで事務局員が一本釣りで探してきた。メンバーは「群の会」のメンバー、退職した学校教員、民生委員、「JUMP」のOBなど居場所の理念を理解し賛同する人で構成されており、地域活動への参加経験が豊富な人が多い。

スタッフは現在20代から70代までの25名が登録しており、1ヵ所1名体制で担当している(「あそんでいいとも」のほうは複数配置されている)。スタッフは毎日の様子をスタッフ日誌に書き、居場所の情報を共有している。また、月1回の定例会を開いて、居場所のことを振り返り、気になる問題について話し合い、対応について意見の疎通を図っている。そのほか、放課後子ども教室や青少年育成関係の研修機会も提供されている。

3.2 スタッフの関わり方

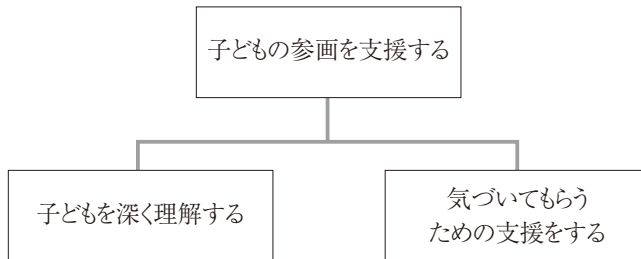
3.2.1 スタッフ支援の価値・姿勢

本項ではスタッフの語りから、普段支援する時の価値観や姿勢を明らかにすることを試みた。図3は分析のなかで読みとれた価値観や姿勢を示したものである。ここでいう価値観はスタッフが実践をするうえで大切にしていることである。その中心的な部分、つまり実践の究極な目的は子どもを受け入れて関係性を築き、自己決定や自主性を促し、〈子どもの参画を支援する〉ことを通して、子どものエンパワーメントをはかることである。ここでいう〈子どもの参画〉とは、日常生活のなかで、自ら考え、発言し、行動することを意味している。そして居場所での支援はその日常的参加の積み重ねを支えることである。そういった支援を、スタッフは〈子どもを深く理解すること〉、〈気づいてもらうための支援をすること〉を通してつくっている。

H:やはり子ども自身が考える、子どもが考えて、それを表現する。それを言葉として発する。それはちゃんと大人が受け止めて、その、支援していくというか。子どもたちの可能性をきちんと引き出して、そしてそれを育てていくというか。よく子どもの権利条約で子どもの参画というの言っているんですけど、私はそこまではないですね。人として生きていく、人並みに、普通でいいから、子どもたちがしっかり自分の足で、頭で、考えながら歩いていく。そのために参画というのがとても大事です。

また、〈子どもを深く理解する〉ことは、子どもを〈先入観で見ないこと〉、〈一人ひとりの変化を読みとること〉、〈状況を見極めること〉、〈子どもの背景となる生活を見ること〉などの姿勢や方法が構成している。一方で、〈気づいてもらうための支援〉は〈子どもの気づきを待つこと〉と〈子どもが責任をもつこと〉からなっている。

図3 スタッフの価値・姿勢



3. 2. 2 子どもを深く理解する

子どもを先入観で見ないこと

毎日多様な子どもが居場所を利用しており、それぞれ個性が違う。そこでスタッフがまず大切にしているのは、子どもと関わる時に、先入観を持って接するのではなく、目の前の子どもにきちんと向き合っ、ありのままを理解することである。

E：私は逆にいろんな子どもたちと関わらせてもらっているため、ちょっとこの子が気にかかるなあ、なんかこの子ちょっと普通じゃないとか、ちょっと詰まってるとか、そう思う子になんとか声かけたくなるというか、そんな感じで、で、その子危ないよってほかの人に言われたことがあって、「なんで、普通じゃないの」って、そんなこともありましたけどね。…だから、なんでそんな先入観で見るとかあるのって、ただの中学生高校生じゃない、大人がね、ちゃんと本気になって対峙してやればね、何て怖いこともないだろうってというふうな、そんな気持ちで。

このように、スタッフの子ども観は社会の一般的な言説や周りの人の目線などにとられるのではなく、日常的実践のなかで、多様な子どもと関わることを通して培ってきた自分なりの視点である。そして、それは目の前の子どもとコミュニケーションするなかで形成されるものである。また、子どもたちはさまざまな形で自分の感情を表現し、激しい行動として表してくる子どももいる。スタッフは子どもたちと接する時に、表面的な態度、言葉あるいは行動にとどまらず、その背後にある子どもの真意を汲み取ろうとしている姿勢が見られる。

E：どんな子どもでも必ずいいところがあるんですよ。逆に言えばその見方、見方によってその一つの行動が、あの、よくもあり悪くもありというの。だから子どもたちが何かやっているとき、表面

だけでなく、うむ、この子がなんでこんなことをするか、どういうことを思ってこうしているかと思うと、逆に放っておかないとか、こんなことをしたけど、この人本音なのかと思ってね、本当は何かをしてほしいのに、こうしてほしいのって、逆な視点があるじゃないかなという感じで対応すると、比較的こう穏やかな感じで見てられるかな。

こうして、子どもの行動や言葉の背後に隠れている子どもの意思と感情を読みとるために、ときには自分の見方感を変えながら対応している様子が見られる。そのように子どもを深く理解することによって、子ども一人ひとりの個性やニーズに合わせて対応しているのである。

一人ひとりの変化を読みとる

居場所に来る子どもは常に流動的で、来所する子どもは毎日入れかわっている。そこでスタッフが意識しているのは、大人数のなかで、「一人ひとり」を大切にすることである。したがって、スタッフは観察や声をかけることを通して一人ひとりの子どもの様子を把握し、その日その日の変化を機敏に読みとり、子どもたちの気持ちに寄り添っている。

D：なんかこう何気ないやりとりのなかで、今日は何か違うとかね、なんかその一人ひとりのその変化を読み取れないといけないなと思っているのね。それから、(来所の)回数が少ないと名前とかね、全員が分からない、いつも大体中心になる子がわかるけど、時々ちらっと来る子が覚えられないときもあるから、できるだけ来ている子の名前、顔を覚えて、特徴覚えて、…なんかそういうのを敏感に感じ取れるように、やっていきたいと思うね。

このように、スタッフは常に常連の子どもだけに目を向けるのではなく、来ているすべての子どもたちを大切にしている。子どもたちの変化に気づくことによって子どもに対する理解が深まる。こうした気づきは時々子どもに話しを聴く契機になり、子どもの背景を理解することにもつながる。

状況を見極める

スタッフは子どもたちと一定の関わりを持ちながら、できるだけ子どもを干渉しないようにしている。しかし、トラブルや過激な行動が起きたときには、スタッフは子どもたちの行動を観察し、状況を把握している。

*：やっぱり危ない場面は止めようと、そうならないときは、まあいいかみたいな感じですか？

G：観察してるかな。どこまで泣くかな、そろそろ泣くかなって。あれって今日ずっとやっているけど、いじめられているほうはやられてもやられても、でも、いじめられているほうも行くから、もうちょっと見てみるかなとか。

つまり、スタッフは空気のような存在ではあるが、いつも子どもたちの行動を注視し、状況を判断している。したがって、居場所での仕事は常に緊張や不安を伴うものである。

子どもの背景となる生活をみる

さらに、スタッフは子どもと居場所ですしか接点をもたないが、日常的な様子から子どもの背景や生活様態が見えてくるため、それを通して子どもに対する理解を深めている。

C：で、あの、土日とかは一日入ることもあったので、子どもたちの様子が見れて。うむ、一日入るとね、なんかすごい見えるんだよね。4時間の時よりももっとなんか、一日の生活が見えてくるので、子どもたちが家でどんなふうに行っているんだろうとかというのまでちょっと見えてくるというか、食生活とか、特に(笑)

*：カップメンがお昼みたいな、焼きそばとか。

C：そうそう。最初すごいそれが気になって、何食べてるんだろうなと思って。なんか、なんだろう、お昼をね、お昼お弁当とかを作ってくれない、親御さんが作ってくれないのかなというところが、すごく最初は思ってたんだけど、だんだん、子どもたちも普段はお母さんののを食べているから、このホワイトキャンパスに来たときだけはカップメンを思いっきり食べたいのかな(笑)、と考えるようになったけど。あとは自分でも作れる年頃だから、男の子でも作れる年頃だから、おにぎりを作って持ってきたほうがいいよとか、カップめんだけじゃなくて、とか言うようにはなったね。

ホワイトキャンパスは子どもの生活の一断面である。しかし、スタッフはその過ごし方から見えてくるものから、子どもたちの行動やの背景となる暮らし方を理解しようと努めている。

3. 2. 3 気づいてもらうための支援

子どもの気づきを待つ

居場所のスタッフを選ぶ時の唯一の基準は子どものありのままの姿を受けいられるかどうかという点である。つまり、居場所には多様な子どもたちが来るために、その多様さをまず受け止めることが求められる。そして、その背景には、大人から言われて動くのではなくて、子ども自身が「気づいて」、納得して行動するように、子どもの本当のエンパワーメントになるような支援をしたいからである。

H：居場所にはいろんな子が来ますから、子どもたちが来た時に、その子のそのままを受け止めてくれる人、どんな子であってもまずは受容できる人、そんな人にいてもらいたい。あとは、すごく難しいですけど、命にかかわることがおきない限りは、まず喧嘩しても、なんでもあっても、まず黙って見守るといふか、そこは子ども自身の社会であって、いいも悪いも…本人はこれがよくないよなって、気づいてもらうといふか、気づいてもらうための支援。究極の目標はそうです。それがすごく

難しい。根気が要ります。時間がかかるし、叫んだほうが楽。「やめてよっ!」とか、「だめっ!」とか。でも、それはね、言われて直るような子はあまり来ていないし、言われてその場限りでは、本当にその子自身のものになっていない。だからやっぱり、気づきの支援といえますか、すごく難しいですけど、そういう感じでお願ひしています。

居場所のスタッフはよく「子どもたちのルールでやればいいんじゃない」というように、できるだけ子どもたち自身で居場所をつくるように支えている。そのため、我慢して子どもの気づきを待つようにしている。

C:(スタッフをして)我慢する(ようになりました)。言ってしまいたいけど、いますごいこれを注意してあげたいんだけど、注意したいけど、こっちがこうががががして、注意したいけど、言っちゃだめ。(笑) 難しいよね。気づいてほしいよね、一番がね。

またこのような姿勢は最初から定着したものではなく、実践のなかで子どもとの関係性を通して身につけてきたものであることも読みとれるだろう。

子どもの責任感を育む

居場所では、スタッフは子どもを大人になりかけの一人として接している。そのため、居場所で何か問題を起こしたときに、まず、子どもたちとスタッフで解決策を考えることを重視している。問題が起きるときが学ぶチャンスであるというように、居場所のスタッフは子どもたちが失敗から学ぶことを意識している。たとえばある日、中学生と小学生の何人かが混ざって居場所でサッカーをしようと言い出して、やわらかいボールを使っていたため、スタッフが遊ぶ範囲を決めて許可し、隣でついて見ていた。わいわいやっていて、スタッフが用事で離れたとたんに、ボールが(壁にあった)大きなガラスに当たって、割れてしまった。スタッフはすぐに戻って、まずみんなでガラスの破片を始末して、子どもたちに話し合いをさせた。最初はみんな自分がぶつけたのではない、最後にぶつけた人が責任を取るべきだと主張した。そこでスタッフは、「でもみんなで一緒に遊んでたし、そのぶつけた人だけに責任を負わせていいのか」と問いかけた。すると中心になっていた中学生が「じゃ、俺小遣いを出す」と言い出した。そうすると、周りの小学生たちも「じゃ、自分も募金するから」と言い出す。スタッフは事務局と相談したうえで、運営費で新しいガラスを購入するが、子どもたちには親に頼むのではなく、自分の小遣いの範囲で自分のやった責任を形で表すというふうな結果となった。

この対応は居場所の運営方針を明確に現しているように思われる。まず何か起きたときは、話し合いをもって解決策を考える。そして、問題を個人の責任にするのではなく、共同分担する。また、子どもがちゃんとした一人の人間として、親に頼るのではなく、子どもが自分たちでできる範囲内の解決策を考えて責任を担うように働きかける。この出来事のあと、対応したスタッフはこの時の

自分の考え方を次のように語った。

*：たとえば子どもの保護者に言うという手もあったのですが、なぜそうしなかったんですか？

E：あの、なんというかな。こっちの居場所の方針として、こうですよというふうになっているわけじゃないですけども、基本的な考え方は自分のやった、あるいはちょっとした失敗は、自分でやっぱりそれに向かい合って、自分で対応してほしいという気持ちはあります。…あと、やっぱり学校にも親にも話さないで足を運ぶという子が結構いるんだから、やっぱりそういう子が自分のありのままの、本当の、飾らないで、そのままの気持ちを出してリラックスできる場を守ってあげなきゃだめと。で、もちろん事務局のHさんのほうにこういうことがあると、相談して、お伝えして、話し合っ、その結果でもありますけれども、私自身としても、簡単にじゃ、うちにいって、出してもらうということにはやっぱり言うとは思ってませんでした。

つまり、このような対応の仕方には、①子どもが大人になるために、徐々に自分で責任をもって自分のことを決めたり、解決したりすることが必要であるという考え方；②場合によっては、親子関係がうまくいかない子どもも来ているため、家庭に問題を持ち込むことは子どもにとってプレッシャーになるという配慮が根底にあった。また、居場所は家庭からも学校からも独立した子どもたち自分の世界や空間である。だからこそ、自分たちで解決することが大事であって、それが子どもたちの自治的な力をつくることにもつながるのである。

3. 2. 4 小括

ここまで見て来たように、スタッフは一見何もしないようにみられるが、子どもとの関わりのなかで、子どもに対する自分なりの視点を身につけ、子どもの一人ひとりの様子や変化を敏感に読み取り、子どもの個性や背景を受け止めて、子どもを深く理解している。そのうえで日常的に子どもの気持ちに寄り添いながら、子どもたちの気づきを待ち、問題が起きたときに子ども自身が自らの責任に意識するように働きかけている。こうした支援は子どもの自主性や自己決定を促し、子どものエンパワメントをはかるような役割を果たしている。

3. 3 実践のなかの「ゆらぎ」

居場所のスタッフは長年子ども活動に携わってきた人が多く、豊かな経験を持っており、実践のなかで自らの子ども観や子どもへの関わり方を身につけていながらも、毎日の活動のなかで常に「ゆらぎ」を感じている。

D：(子どもに関わる活動を長年やってきたので、)自然、関わるのがすごく自然、自分自身のなかでね。だから、それはいいかなと思ってね。ただ、関わってて、ずっと関わっているから楽ということは何もないね。あの、楽という、楽で測れない何かがあるよね。どちらかと言うと、しんどいと

言うか、やっぱり適当に向き合えない。

G：(スタッフによって)いろんな怒り方をするから、それが子どもには一番いいんじゃないかなと思う。たとえばスタッフになって気が弱くなって、子どもたちを注意できなくなったっていうのも、またそれもありかなと思う。

E：(ガラス事件のあと)初め私がね、一人でね、落ち込んで、ああ、(あの時の子どもたちが)これで足を運ばなくなったら、居場所の意味がなくなるんだよね。本来の居場所の意味がなくなってしまう、足がむけなくなったらね。どうしようって、私自身が落ち込んだんです。どうしたらいいかと思ってね、期間が過ぎたら、そんなんで負けてられないって(笑)。

以上のような語り示されたように、毎日子どもたちに向き合うことは常に緊張感や葛藤がともなっている。それはまず、毎日来所している子どもたちが常に変化しているため、状況が目まぐるしく変わっている。したがって、常に流動している子どもを観察し、その場その場の状況に応じて対応しなければならない。

またホワイトキャンパスでは、スタッフが子どもの独立した活動空間を守るために、場に限定した支援に徹するようにしている。しかし一方で、子どもが常に流動しているため、そうした支援は問題解決へつなげることには限界がある。

そこで居場所では毎月一回定例会が開かれる。定例会では過去一ヶ月の来所者数の報告、スタッフ日誌から気になる問題について振り返りをしながら、情報を共有する。スタッフたちはこの会議の機能を高く評価している。

E：ここは、スタッフ会議の時に、自分の関わった問題をみんなで話をして、相談したり、話し合うという場があるということが、この運営委員会が一番大切なことだし、いいことだと思いますよね。じゃないと、自分だけが抱え込んでしまうけれども、常に円満でいるわけではないですから、またいろんな子が足を運べるような状態でないと、うまくいかないですしね。それでまさに何かあったときには、転機がチャンスというか、何かのきっかけになるということをね、よく話してますけれども。みんなでこう話し合って、解決策を模索するというんですか。高校生が運営委員会に参加するというのも非常に大切なことだし、いいことだと思いますけどね。

このように、スタッフ会議での情報共有や話し合いを通して、「常に円満ではない」実践のなかの感情を分かち合い、ひとりで「抱え込んでしまう」ことを防いで、感情面の支えとなっている。また、話し合いを通して複数の目から子どもをみることができ、問題に対応する姿勢を統一し、共同で支援を築くうえでの意味をもっている。しかし一方で、解決策を議論していても、結果は出ないことが多く、支援の限界によって「うちら試されている」という空回りしたような無力感が生じてしまう

ことがある。また場に限定した実践は外部から誤解を受けやすい面もある。

おわりに

本稿では、岩手県奥州市の中高生の居場所ホワイトキャンパスを事例に居場所におけるスタッフの役割や居場所実践の意味を検討してきた。

まず、子どもにとってのホワイトキャンパスの意味を検討してみた。その結果、子どもにとってはホワイトキャンパスが子どもと子どもとの間、そして子どもとスタッフとの関係性のなかで、子どもを受容して、子どもがくつろげる空間である。それのみでなく、子どもが自己形成をして、活動の拠点として意義づけられていることがわかった。

また、インタビューの中からスタッフが実践するうえでの価値や姿勢を見てきた。つまり、スタッフは常に、子どもが中心で、子どもと関わるなかで子どもに対する理解を深めながら、子どもの自己決定や自主性を促し、子どものエンパワーメントをはかっている。しかし一方で、このような場に限定した支援には限界が見られる。状況が常に生成され、変化しているなかで、スタッフは子どもを中心とする支援に「ゆらぎ」を感じている。また、子どもの独立した空間を保つために、家庭や学校から一定の距離を置いている。それゆえ、地域社会の中には居場所に対して理解を示さない状況も見られる。それは時に居場所の存続に影響を与える問題にまで発展しかねない。

最近の放課後政策では、居場所や放課後の事業をつくる際に、学校、地域、家庭の連携が強調されている。具体的な施策のレベルでも放課後子ども教室や学校支援地域本部などに示されているように、特に地域や学校との連携によって、地域全体で子どもの生活や教育を支援することが進められている。

こうした動向のなかで、ホワイトキャンパスの実践の意味はどこにあるだろうか。なぜスタッフたちは居場所の独立性を大切にするのだろうか。それは、子どもの自己形成にとって、試行錯誤しながら、子どもと子ども、そして子どもと多様な大人との相互作用のなかで、自分の世界を探求し、自己を拡大させていく空間が必要だからである。ホワイトキャンパスは子どもが自由な過しかたのなかで他者との関わりを通して自己を形成する空間をつくることに意味があるだろう。今後の政策を進める際に〈子どもの自己形成〉という視点から、事業の内容や進め方、そしてスタッフの関わり方を吟味する必要があるのではないだろうか？こうした問いをこの事例は投げかけている。

【参考文献】

1. 喜多明人(2002)「ハートの『子どもの参画』を読み解く」子どもの参画情報センター編『子ども・若者の参画』萌文社
2. 久田邦明(2000)『子どもと若者の居場所』萌文社
3. 久田邦明(2008)「地域活動としての居場所づくり」神奈川大学心理・教育研究論集27:65-76
4. 水野篤夫(2001)「居場所づくりの指導者論」田中治彦編『子ども・若者の居場所の構想』学陽書房
5. 水野篤夫(2004)「実践をふりかえる方法としての事例研究と職員の力量形成」日本の社会教育48, 東洋館
6. 萩原建次郎(2009)「子ども社会学研究の課題と展望—社会教育研究の立場から—」子ども社会研究15号

7. 萩原建次郎(2004)「青少年支援者の力量形成と支援の在り方についての臨床研究—京都市南青少年活動センターの取り組みから学ぶ—」, 駒澤大学教育学研究論集第20号, 67-109頁
8. 萩原建次郎(2001)「子ども・若者の居場所の条件」田中治彦編『子ども・若者の居場所の構想』学陽書房
9. 萩原建次郎(2002)「子ども・若者の居場所空間とデザインの方法」日本の社会教育46, 東洋館
10. 平野裕二(2001)「『身近』で『ふつう』の子ども参加を」人権教育16, 6—13頁
11. 田中治彦(2001)「居場所づくりの方法論—その方法と課題」田中治彦編『子ども・若者の居場所の構想』学陽書房
12. 田中治彦編(2001)『子ども・若者の居場所の構想—「教育」から「関わり」へ』学陽書房
13. 西野博之(2006)『居場所のちから』教育史料出版会
14. 日本社会臨床学会第10回総会報告シンポジウムⅡ(2002)「『場』と『専門性』をめぐって—日常の関係を問い直す」, 社会臨床雑誌第10巻第2号

【註】

- i 久田邦明(2008)「地域活動としての居場所づくり」神奈川大学心理・教育研究論集 27, 65-76;「特集 中高生の居場所づくり—岩手県水沢市の活動から—」青少年 vol.362, 2003;大村千恵(2006)「声にならない心の叫びに耳を傾けて—「ホワイトキャンパス」という居場所の意味」(特集 子どもの権利を創る—つぶやく子どもと向き合う大人) 月刊社会教育 50(6), 30-36など。
- ii 2006年に市町村合併によって奥州市水沢区になる。
- iii 奥州市水沢青少年育成市民会議(2010)、『ホワイトキャンパス10周年記念誌 ホワ10』、P12。
- iv 筆者は2011年1月から2月までは予備調査で担当者のヒアリング、中高生定例会の参加を行った。その後震災により一時的中断し、5月から毎月あわせて5日程度で通い、土日は8時間、平日3時間程度で、9月まで合わせて21日間にフィールドワークに入って観察を行った。
- v インタビュー対象は「JUMP」のメンバーの高三の女子一人と高一の女子一人である。
- vi ホワイトキャンパスのホームページより。http://homepage3.nifty.com/whitecanvas/information/num_of_user.htm
- vii 「JUMP」は1994年に旧水沢市の青少年事業「寺子屋」に参加する中高生が有志で作ったサークルである。会員は48人(2010年現在)いて、奥州市内在住及び在学の中高生から構成している。普段は二ヵ所の居場所運営に参加するほか、募金活動、子ども会活動への協力、成人式や地域行事を支える役割を担ったり、他県のジュニアリーダーとの交流をしたりするなど幅広い活動の展開が見られる。

Establishing “ I-basho” and the Role of Supporters

: The Example of White Canvas in Oshu, Iwate Prefecture

Zhi LI

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

The aim of this study is to discuss the role of staff taking as an example White Canvas in Oshu, Iwate Prefecture. At first I examined the meaning of the “ I-basho” as understood by participating children. Then I investigated the value and attitudes of the staff and examined the limits and possibilities of the “ I-basho”.

The study produced a range of results and conclusions. Staff members build and develop their practice through promoting self-determination and independence among the children based on the value of “supporting children’s participation”. Furthermore, they base practice on “deep understanding” and “encouraging children to become aware of things by themselves”. Staff members value the independence of the “ I-basho” as “a third space” and report a sense of “fluctuation” in their practice. There is considerable significance in the White Canvas providing “a third space” where a child is in free relation with others, highly suggestive with regard to “I-basho” in general and provision of after school facilities for children.

Keywords : I-basho, a third space, supporter, role

